

於染
久松

秋迺七草

六



13
3393
6



明へ18
3393
6

松蔭 情史秋七草 卷之五下

五情文庫

花外庵

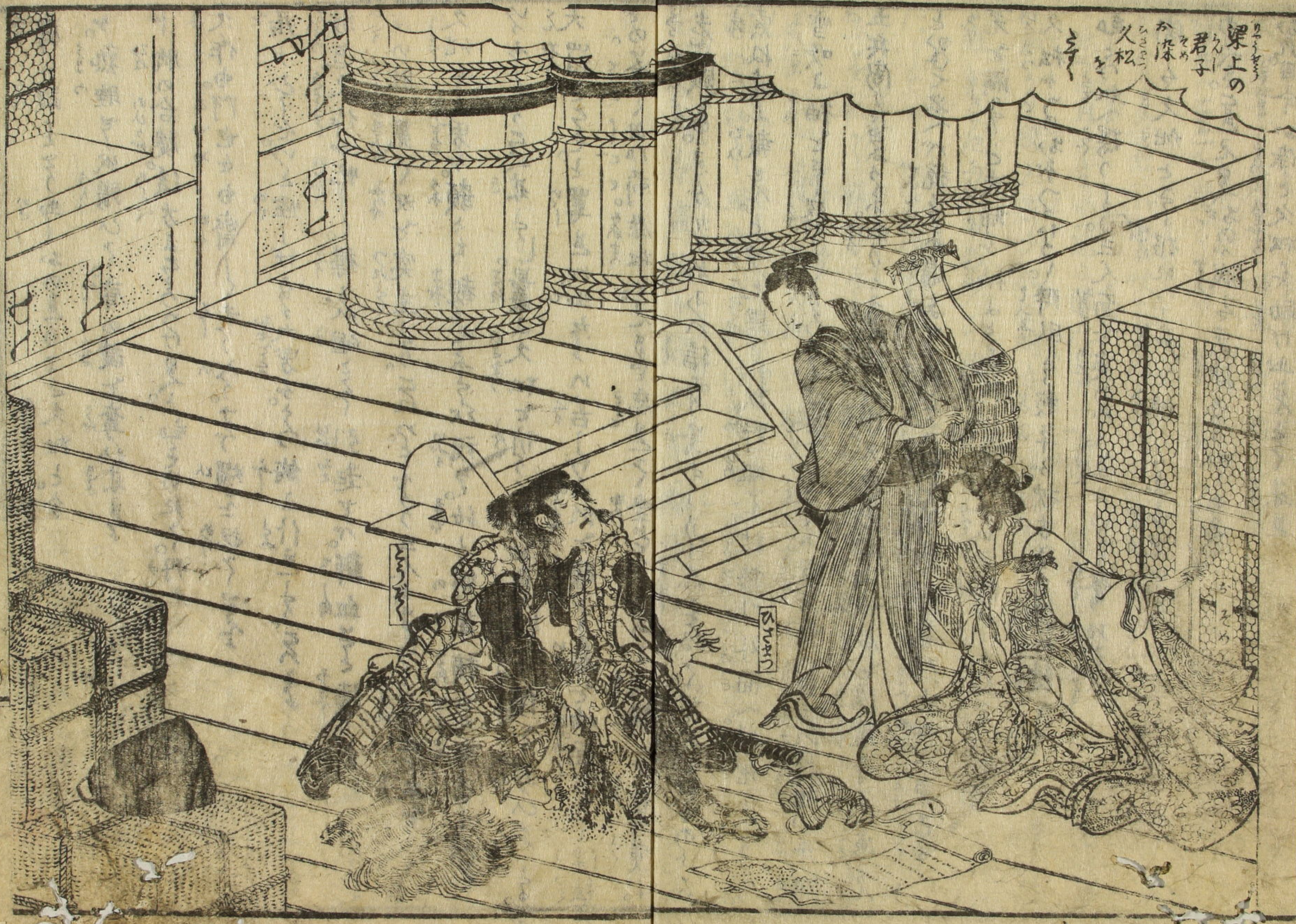
○第十 瞿麥より 草

故郷とていふも夏より。なう草の袖の。今も候々なるもの
園生よぬ庫の中痛しや久松が。れも人の子。子の子。火桶の中。さ
も冷く。さる。堪がかりぬべし。ゆけが。さる。この園子。あて。実の。又。母を。さる。に
と。下。さる。ぬ。憂。さる。養親の禁獄を。故人。為。身。を。賣。て。外。へ
あひ。定め。と。愁。さる。又。又。助け。ら。し。る。悪。因。縁。恩。を。さる。入。り。濃。衣。を
年。の内。より。さる。と。ゆ。綴。あ。ハ。下。漆。色。の。漆。ど。よ。か。る。傳。ハ。さ。る。毛。子。を
ゆ。さ。と。久。他。ど。の。恨。も。初。か。さ。け。結。髪。也。夫。ハ。さ。る。即。撮。と。あ。い。ん
あ。い。ん。の。試。ね。と。う。る。人。を。冤。う。る。悪。報。も。親。年。より。主。と。ま。て。い
隨。ふ。余。と。う。る。も。あ。い。ん。面。貌。さ。る。良。人。へ。い。解。う。も。さ。る。述。を。さ。る。作

昭和九年
三月六日
小田野氏
衣男及不
おれ

公孫請史送之江

梁上の
君子
お深
久松
き



庫の鍵をとり出し、おのゝ由より久松と令弱を落え為よ客房に
熟睡せし張ひく。庫の鍵を奪ひまじり。原本互ふひきあはれど、秘へ同
下胸の合鍵後方より取りつけんとし、むめ死す。丹五兵衛が川岡の庫の六口よ
久作も阿也女も齋しく走り入り。すぐ燭を拭くそんう見えぬ。お深久松も
居たぐいと怪しげなる大男がうろ俯又什是し。火をもつてあともうち
駭き久作が忙しく襟を掴み引き起せば鮮血さして瀆る。自叙と見えて
左の肚へ見く刃を突き立てこれやとよく三人かすなり呆れて死なざれば
久松大男が顔うち覗くとうらび死す。故々野草摘出九郎ありと云
りやとろく成すに曩又久松を斬りて牙と售し。牙價を奪ひしう。
天罰さると罵る。出たりハ苦いけ。改を擡息を吻面する。津積
よき多母前津松と云りや忘る座と云といふ夫婦を驚愕。
はくくえまば稚貞の残る額の子や。紛ふところだ子。癖者
ハ子と云ふ憎し。とりど可憐な殊よりや。母宛に携著てどうと泣
丹五兵衛ハさふ羞む。子が収まびえもうべ久松は対ひていふ。
おのづかの津松が更下を津積と吸ひける。あれバ昔日云元の密意を稟
標丸は俱しく内を逐電せとせ。津積窪六有笑あり。やと結う聞れ
て久松も文を預る。か舊名をあるもの原何人ぞと問ふ。丹五兵衛
莞尔としう笑ふ。今いつか入匿むす。は楠正儀次晋代の邸黨赤坂
を退き。和田正武仕は。難居兵衛言直が浮世を隔る油商人自叙
せ。癖者ハ九寸の時勸當せ。孩児津松といふのは足下も彼主君乃
嫡男足下も彼姫君と守冊さるる臣民士はありや。あつた小厮久松
ハ楠氏の稚君標丸お深といひハ和田の息女秋野姫と堅き奴とも

ふとびて、稔平を斬る為、又浮名を肩せり。か、深久松が淫奔も、不義の
あつて、戒の道は、稱ふも、不思議の良縁奇耦。こゝろとて、三入が
呆然と、忙然と、うて、兵衛、窪六木、の、深松が、左右に居て、声とて、
稚君、姫君、在る、い、汝が、所為、は、疑ひ、う。惡提、ども、頼、こゝろ、飲、み、
往方、とて、告、首、伏、せ、と、い、な、る。隅、廻、る、揺、動、し、赤、う、ろ、又、と、有、義、と、
う、て、落、涙、し、九、方、の、う、ろ、う、ろ、三、惡、道、へ、踏、迷、ひ、不、孝、非、多、ハ、世、の、稀、
ある。深松の、生、九、郎、が、自、ら、の、親、賢、人、時、至、り、親、の、家、に、い、ま、る、と、
う、大、歳、の、庫、ハ、主、君、の、厄、と、一、箇、と、面、を、え、え、ね、ど、互、は、名、告、め、ひ、の、
丸、と、秋、野、姫、の、幼、標、は、う、う、羞、故、主、へ、と、一、世、の、忠、野、崎、あ、く、惡、計、せ、出、九、
郎、と、怒、り、ま、ま、い、快、う、の、受、め、と、深、念、く、假、声、と、懐、る、金、を、路、費、
加、之、稚、氏、と、い、又、追、ま、て、宿、も、有、り、且、う、の、縁、を、住、一、卒、見、ぬ、山、の、右、廟、
へ、ま、ま、と、世、に、武、士、の、所、お、り、の、金、を、と、ぬ、ひ、逐、ひ、ま、の、の、り、系、圖、の、香、神、
へ、ま、ま、と、世、に、武、士、の、所、お、り、の、金、を、と、ぬ、ひ、逐、ひ、ま、の、の、り、系、圖、の、香、神、
書、を、稽、て、習、う、と、間、隙、の、術、と、う、の、仇、と、ま、ま、は、牙、を、は、つ、野、草、摘、と、
名、呼、れ、と、河、内、の、野、崎、の、ま、ま、年、を、経、て、入、は、忌、を、残、忍、り、親、標、君、と、い、あ、う、
孝、子、と、斬、り、て、牙、を、售、ら、し、その、身、價、を、奪、ひ、と、ら、れ、う、先、あ、も、彼、御、
ふ、く、之、他、ど、の、仮、虎、と、非、道、の、利、を、射、る、箭、竹、の、藪、に、淵、九、郎、が、首、を、埋、
う、え、舊、の、首、級、の、親、音、堂、の、簀、子、の、下、へ、投、入、し、が、今、さ、う、あ、く、は、彼、首、級、
ハ、正、え、命、の、首、あ、く、め、り、え、り、の、仮、い、と、思、い、と、ま、れ、う、う、が、牙、が、疎、く、
稚、君、姫、君、の、死、物、猪、あ、く、久、地、ど、の、旧、名、を、改、忠、義、を、感、し、且、羞、て、不、孝、
非、義、の、萬、分、一、今、宵、ぞ、う、と、樺、井、の、兵、書、と、金、を、財、布、へ、納、ま、標、丸、へ、進、
らせ、う。秋、草、姫、の、う、と、も、か、彼、れ、の、窓、より、延、落、ち、の、う、せ、が、あ、ん、眼、前、あ、く、

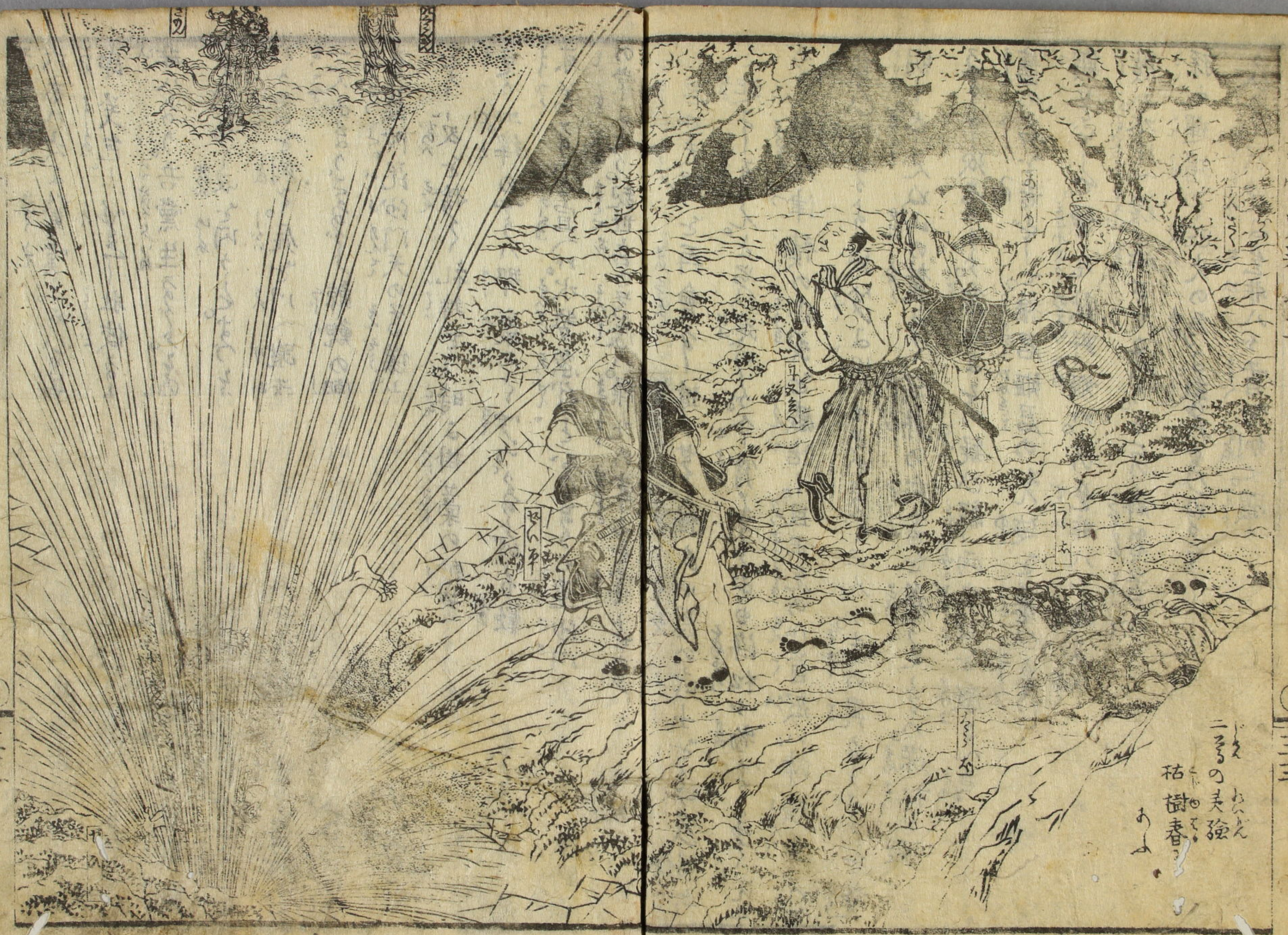


西狩
を
み
ら
る
は
非
は
久
松
を
害
む



共ニ水中へ移ひ入る。中々を沈むひらる。是非ハる元ハ驚き慌て秋野
 姫を引揚んとく岸より持とうあうと水泳しとるもさうくもあて
 果さず。彼方此方と走り繞るも。遂にせんてうりし。忙しうて
 川の上は立在久松を殺しゆれ。あひもうけぬ開禱の儀杖は。お凍る水中
 へ滾り落る。角を切り牛を殺し枝を繋て花を散らぬ。畏る。速莫
 天の明を待ちて二人が屍を引揚る。首級を活へ上せられぬ。又益
 の殺生ゆへに。さうするのより賞罰とて。とる。件の財布を
 拾ひ。雪吹面を打ち堪えけし。柳の蔭へ退れ。財布の紐を解ん
 とる。掛票の脊は人ゆて是非ハ改醫をす。ゆとる。細バ叫苦。と
 むう。又駭き走り退んとされぬ。あふ。叫ん。さう。小声出。さう
 り。又足を踏。とる。仰。さう。入。さう。葉の中へを隠れる。
 浩処。津積窪六。雜居兵衛夫婦。雅君姫君のおん往方。さう。は
 内。とる。喘。天満と天神。橋の間。さう。三人
 等。太郎犬二郎犬が屍。跪。その死。とる。大。驚。は
 雪。あう。透。観。小。数十根の長。髪。散。落。雪。上。仰。足。跡
 の。ひ。さ。れ。ぬ。疑。入。ず。あ。ね。操。丸。と。秋。野。姫。へ。さう。驚。れ。ぬ。さ
 る。ん。嗚。呼。後。さう。折。と。衆。皆。遺。恨。の。涙。を。禁。め。ぬ。勢。竭。く
 撲。地。と。坐。し。雪。を。個。々。面。を。あ。り。物。い。へ。う。あ。さ。り。か。兵。衛。の。臉。を。押
 拭。ひ。さう。四月。山。家。税。卒。を。撃。て。捨。て。け。し。小。緯。と。穂。便。ふ。さ。め。ん。との。さ。う
 移。ふ。ろ。禍。を。醸。さう。推。君。姫。君。幸。ふ。と。さう。怒。れ。ぬ。い。ど。の。既。は
 擒。と。う。り。の。め。え。命。助。も。あ。う。あ。さ。り。さう。これ。臣。ホ。罪。う。る。己。さ。う
 と。慚。愧。後。悔。し。て。腰。の。刀。を。抜。と。う。さう。腰。を。切。え。と。され。ば。窪。六。豊。田

八幡神の宮に



八幡神の宮に

二の夫婦
枯樹春
あふ

六木ハ大ニ驚嘆シ。あひを平。山家生也。又楠家の忠臣百濟右衛門
 郎美色ト。必マ一壯使るんと。今ハ何ぞ。只憎む。さきのハ
 非ハあり。吾黨生る。その肉を喰ふ。百濟生の賜ふ。と散動
 する。おのく又を閃く。と。その手足を破落く。苦。美色。其非
 ハ。首を刎る。屍を川へ蹴落せ。奇。水。激。逆。の。心
 一。大。あ。ま。う。る。鯨鯢の潮を吐。異。忽。光。明。赫。変。と。記
 音薩陀毘沙門天の。像。水。折。り。あ。り。ハ。衆。皆。奇。異。の。心
 を。又。捨。て。礼。拜。せ。り。時。掛。藁。の。彼。首。より。操。九。秋。野。姫。化。く
 ま。り。玉。緯。の。中。ハ。那。裏。さ。く。穿。つ。る。も。不。可。説。く。夫。婦。え
 其。恙。有。り。宣。ハ。水。勢。忽。移。と。あ。ま。う。て。毘。沙。門。天。の。像。ハ。秋。野。姫
 の。掌。止。り。記。世。喜。の。像。ハ。操。九。の。掌。止。り。宿。の。心。ハ。兵。衛。夫。婦。

陸。六。右。門。太。郎。亦。ハ。の。形。勢。不。雀。躍。し。原。來。彼。神。仏。が。身。の。り。は
 ち。の。ひ。ふ。り。と。い。ふ。も。思。い。と。喝。仰。隨。喜。の。決。拭。ひ。の。心。ハ。推。居
 姫。君。不。條。松。が。自。叙。の。り。又。い。え。あ。げ。右。門。太。郎。ハ。是。非。ハ。奪。ひ。こ。り。
 財。布。の。中。の。移。井。の。兵。書。と。金。と。を。獻。す。當。下。操。九。ハ。秋。野。姫。と
 と。四。人。の。忠。義。を。賞。嘆。し。て。且。條。松。が。自。叙。を。惜。み。兵。衛。ハ。一。ひ
 毛。擲。く。主。の。條。松。が。後。の。り。又。い。え。あ。げ。述。り。其。心。ハ。あ。ま。う。て。近
 隣。の。為。ニ。疑。ん。故。と。宣。ハ。點。止。と。雜。居。兵。衛。ハ。豐。浦。を。め。く。毛
 擲。く。主。の。陸。六。右。衛。門。を。葬。ハ。主。君。の。お。供。と。何。内。移。り。赴。き。つ。次。の
 日。兵。衛。夫。婦。ハ。條。松。が。亡。骸。を。煙。と。す。白。骨。を。頂。み。け。大。和。へ。赴。き。く。
 こ。こ。を。法。隆。寺。と。葬。す。近。世。の。釋。號。浪。華。見。同。録。と。い。ハ。の。心。
 お。條。松。が。墓。ハ。法。隆。寺。と。あり。と。記。す。ハ。る。る。心。ハ。操。九。ハ。

野崎の記 読者堂の簀子の下より。又正元の融解と書出して。源
 氏を葬り。正直坊慈善と。夥の金を布施し。正元の亡日毎に。焼
 通し。観世音の仏恩を拜謝する。兵衛豊浦も。集うのひつ。主従に
 志記の毘沙門堂。又系流し。遂に吉野の奥に。川筑する。時の到る
 ころ。秋野姫の腹に。一男一女出生し。嫡子に。楠七郎と。名告じ。息女
 の名を。後大和の。越智姫と。する。かく。夥の軍を。起し。楠
 城忠先祖より。方うと。志づく。足利の大軍と。戦ひぬ。楠七郎の。るハ。後大和の。越
 智姫。天皇南山に。遷幸めし。より。五十五年。より。南北両帝
 の合體する。その後五十年。を経て。南帝。より。吉野に。起る。ひ
 の。後十五年。より。南帝。より。ひつ。南朝の。前後
 白々年。より。亡び。ひつ。

○今茲予が著述の稗史五部。所謂松陰情史五冊。俊寛嶋
物誌八冊。頼豪怪氣傳後編四冊。旬殿實記十冊。椿説
弓張月統編六冊。亦合巻と稱する餘草紙三部。釣瀧
弥左傳十冊。小女郎蜘蛛十二冊。山中鹿之女。推物誌十
冊。統計八部。六十五巻あり。正月下旬ふ草を起して。十一月
中旬筆を絶。又書第一巻。第二巻。ハ七月六日。又八月九
七日ふ到りて稿了。秋後病病より。筆硯に親む。され
ども。書肆の爲に責らる。まづ怪氣傳。弓張月。旬殿實
實記。俊寛嶋物誌。ホの稿を脱し。遂に十一月四日に至りて。
ゆるび。亦三巻より稿を起し。又四巻。五巻。共九十餘

馬琴再識

松染情史秋七草卷之五

曲亭馬琴

歌川豐廣卷

鈴木武翁做書

井上治兵衛刀

山崎庄九郎

江戸曲亭先生編演

仙壺茶譜利久著

浪華文金堂梓

素已十二月發賊

歌以一柳齋主人画

三

馬琴 画賛 あみさ
神田通鍋町書肆 かしきふあり
るいの鳴呼るる所為多れど雅俗繁雜ゆく。その精々毎々悉意ぐるて紙張むじりて
著述のいともする。夢を添くうとそめうとされ。かひん己を志すれの前脱をうとてやんぬる。

俳諧歳時記
四季の詞林細注。○とんちやく會する
人ものふふふふふふふふふふふふふふふふ
全二冊

新撰鮮脱物語
一名巷談因果經
葛飾北齋主人画
全五冊

江戸日本橋室町十軒店書肆
文利堂
西村源六

刷橋筋唐物町書肆
文金堂
森本太助

11

馬琴伏桌近曾行書肆... 序... 亦... 或... 省... 最... 惜... 不... 馬琴... 神田通鍋町書肆... 著述の... 馬琴... 序... 亦... 或... 省... 最... 惜... 不... 馬琴... 神田通鍋町書肆... 著述の...

東都曲亭先生著述目次 浪華書肆 河内屋太助梓

俳諧歳時記 四季の詞林細注... 全二冊

月氷奇縁 専祿年間孝子傳... 全五冊

新累解脫物語 一名巷談因果經... 全五冊

俳諧人物志 守武より貞門蕉門... 近刊

江戸日本橋室町十軒店書肆 文利堂 西村源六

文化六年己巳春正月吉日發販

大阪心齋橋筋唐物町書肆 文金堂 森本太助

